鹿児島県歴史資料センター 黎明館企画特別展
南からみる中世の世界～海に結ばれた琉球列島と南九州～ 連携事業

かごしま

遺跡フォーラム 2014

～発掘調査の成果からみえてきた中世のかごしま～

資料集

平成26年
10月26日（日）
13：30～16：30
鹿児島県歴史資料センター 黎明館
2階 講堂

主催：鹿児島県立埋蔵文化財センター 共催：公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター
鹿児島県歴史資料センター 黎明館

●お問い合わせ 鹿児島県立埋蔵文化財センター 霧島市国分上野原縄文の森2－1
TEL：0995-48-5811 FAX：0995-48-5821
E-mail：maibun@jomon-no-mori.jp

ごあいさつ

本日は,「かごしま遺跡フォーラム２０１４～発掘調査の成果からみえてきた中世のかごしま～」にようこそおいでくださいました。

このフォーラムも３回目となりますが，今回は，鹿児島県歴史資料センター黎明館の共催をいただき，現在，同館にて開催中の企画特別展「南からみる中世の世界～海に結ばれた琉球列島と南九州～」と連携した催しとして,「発掘調査の成果からみえてきた中世のかごしま」をテーマに開催いたします。また，昨年４月に設立されました，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターからは，東九州自動車道建設に係る発掘調査の成果等を報告していただきます。

発表では，まず，今年度上半期に行われた鹿児島県内の発掘調査の中から，一部を速報で御紹介いたします。次に，文献史の分野からと今までの発掘調査の成果を中心に,「中世のかごしま」について，薩摩半島と大隅半島のエリアに分けて報告いたします。そして最後に，文献史料や考古学資料等，様々な側面から「中世のかごしま」にアプローチし，当時の社会や人々の様子を，会場の皆様方とともに考える機会になればと願っております。

本日は，どうぞよろしくお願いいたします。

平成 26 年 10 月 26 日

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長　井ノ上　秀文

【本日の日程】

１３：３０　開会のあいさつ

鹿児島県立埋蔵文化財センター　所長　井ノ上　秀文

１３：３５　第一部　発掘調査速報

「知覧道路関連遺跡」（南九州市）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　文化財主事　辻　明啓

「永吉天神段遺跡」（曽於郡大崎町）～東九州自動車道建設に伴う調査より～

（公財）鹿児島県文化振興財団

埋蔵文化財調査センター　文化財専門員　湯場崎　辰巳

１４：３５　第二部　発掘調査からみえる中世のかごしま

「文献からみた中世のかごしま」

鹿児島県歴史資料センター黎明館

主任学芸専門員　栗林　文夫

「発掘調査成果からみえてきた中世の薩摩半島」

鹿児島県立埋蔵文化財センター　文化財主事　関　明恵

「発掘調査成果からみえてきた中世の大隅半島」

（公財）鹿児島県文化振興財団

埋蔵文化財調査センター　　調査第一係長　中村　和美

１５：４５　第三部　パネルディスカッション

基調発表「南からみる中世の世界」

鹿児島県歴史資料センター黎明館

主任学芸専門員　中原　一成

コーディネーター：鹿児島県立埋蔵文化財センター　調査課長　前迫　亮一

パネリスト：中原一成，栗林　文夫，中村　和美，関　明恵

【資料集目次】

発掘調査速報

「知覧道路関連遺跡」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

「永吉天神段遺跡」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

発掘調査からみえる中世のかごしま

「文献からみた中世のかごしま」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

「発掘調査成果からみた中世の薩摩半島」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

「発掘調査成果からみた中世の大隅半島」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

基調発表

黎明館企画特別展

「南からみる中世の世界～海に結ばれた琉球列島と南九州～」・・・・・・・・・・・・・19

中世年表

用語集

知覧道路関連遺跡の発掘調査速報

県立埋蔵文化財センター　辻　明啓

鞍曲遺跡について

鞍曲遺跡は，平成 25 年度から発掘調査を行い，本年８月に調査を終了しました。

シラス（約 28,000 年前）の上の層から，旧石器時代の遺構・遺物が，台地の縁辺部に集中する状況で発見されました。

〈遺跡の立地〉

鞍曲遺跡は，南九州市知覧町郡にあります。現在，川辺側から知覧トンネルを掘り進めているところですが，遺跡は知覧側出口予定位置の正面にあります。遺跡の直下に厚地川が流れる台地の縁辺部に立地しています。標高は約 140mです。

〈注目される点は…？〉

合計 55 基の礫群（石蒸し調理などを行ったと考えられる）と石器および石器製作を行った際に出る破片が集中的に出土するブロックとよばれる遺構が発見されたことです。

礫群は，最大数 400 個を超えるものから，数個程度の小規模なものまで，様々な状態で検出されました。この多様さが，どのような状況から生じているのか，検討していく必要があります。

また，遺物が出土しているシラスの上の層は，大隅半島をはじめとする他地域との比較ができます。今後，これらの地域の遺物と比較検証を行い，この時期の石器製作の状況などを調べていくことが重要になります。

高付遺跡について

高付遺跡は，平成 25 年度から発掘調査を行い，本年度で発掘調査を終了します。

これまで縄文時代後期（約 3,500 年前）の遺構や遺物，古代～中世（約 1,200～500 年前）の遺物が発見されています。また，現段階で明確な時期を特定できていませんが，時期不詳の柱穴状ピットが多数検出されています。

〈遺跡の立地〉

高付遺跡は，南九州市川辺町野崎にあります。現在開通している，南薩縦貫道の南九州川辺 IC の南側正面になります。北側に万之瀬川の支流である野崎川が流れる微高地の縁辺に立地しています。標高は約 50mです。

〈注目される点は…？〉

平安時代末期～室町時代と考えられる遺物が出土していることです。それらの中には，威信財的な陶磁器等も含まれていることから，それらを入手することができる人物がいたことが考えられます。

また，直線距離で約 250m離れた場所には，南九州市が平成 19 年から 20 年にかけて発掘調査を行った馬場田遺跡があります。類似する遺物が出土していることから，今後，比較や検討を行っていく必要があります。

周辺には，松尾城跡や清水磨崖仏群等，同時代と考えられる遺跡が多いことから，周辺の状況を確認し，関連性を検討していきながら整理作業を進めていく予定です。

知覧飛行場跡について

知覧飛行場跡は，本年５月から発掘調査を行っています。昭和 17 年１月から昭和 20 年８月まで利用された旧日本陸軍の飛行場で，これまで滑走路跡や造成痕が見つかっています。

また，周辺には最近公園として整備が行われた，掩体壕跡など，知覧飛行場関連の施設跡が点在しています。

〈遺跡の立地〉

遺跡は，南九州市知覧町西元一帯に広がる台地にあります。現在，住宅地が広がりを見せていますが，飛行場建設当時の面影が，現在も台地上に広がっています。標高は約 150m です。

〈注目される点は…？〉

知覧飛行場跡は，昭和 16 年に工事が行われ，昭和 17 年に大刀洗飛行学校分教所として建設されました。建設にあたっては，平らではなかった台地の上を，大型の重機ではなく，人力により造成等が行われた記録や証言が残っています。太平洋戦争末期に，陸軍の特別攻撃隊の基地となりました。特別攻撃隊の基地になったことで，訓練施設としての機能から特別攻撃機が発着可能になるよう，飛行場は二次拡張を行って滑走路を広げています。

本年１月の試掘調査や５月の確認調査で，飛行場の滑走路と考えられる硬化面，排水路の跡，飛行場面を作るときの造成痕が確認され，現在南九州市が本格的な発掘調査を行っています。

関連遺跡の位置図

鞍曲遺跡

礫群検出状況

遺物出土状況

高付遺跡

遺跡遠景（道路末端が遺跡）

ピット検出状況

知覧飛行場跡

硬化面（白色パミス混じり黒色土）

排水路跡検出状況（矢印部分）

永吉天神段遺跡の発掘調査速報

（公財）埋蔵文化財調査センター　湯場﨑　辰巳

永吉天神段遺跡について

永吉天神段遺跡は，東九州自動車道の建設に先立ち，平成 23 年度から発掘調査を行っています。

これまでに，縄文時代早期（約 7,300 年前）の巨大な地震に伴う噴砂跡，縄文時代前期（約 5,000 年前）の土器・石器，弥生時代（約 2,100 年前）と平安時代（約 1,200 年前）の集落跡や鎌倉時代（約 800 年前）の墓などが発見されています。

永吉天神段遺跡位置図

〈遺跡の立地〉

遺跡は，曽於郡大崎町永吉の档ヶ山集落にあります。持留川とその支流に挟まれたシラス台地に立地しています。標高は約 50m です。

【弥生時代】

本年度の調査では弥生時代の人々の墓が多くみつかっています。本遺跡では大きく分けて３つのタイプの墓があります。

１つめは深さがあり，細長く，底の方が幅広くなるタイプ，２つめがまず下に向かって掘り込み，その後横に掘り込んでいく靴の形のようなタイプ，３つめは比較的浅く，鉄鏃や磨製石鏃などの遺物を伴う場合が多いタイプです。

なぜこのようにいろいろなタイプの墓があるのか，葬られた人の階級差や墓が作られた時期差など，いくつかの理由が考えられますが，今後の調査で解明していきたいと思います。

タイプ１の墓
（細長く，深いタイプ）

タイプ２の墓
（下に向かって掘り込み，その後横に掘り込んでいく靴の形のようなタイプ）

タイプ３の墓
（幅広で比較的浅く，遺物を伴う場合が多いタイプ）

小高い丘の部分があり，その最頂部に近いところから円形周溝墓がみつかりました。タイプ１の墓と思われる部分を主体部として，直径約８ｍの周溝が巡らされています。

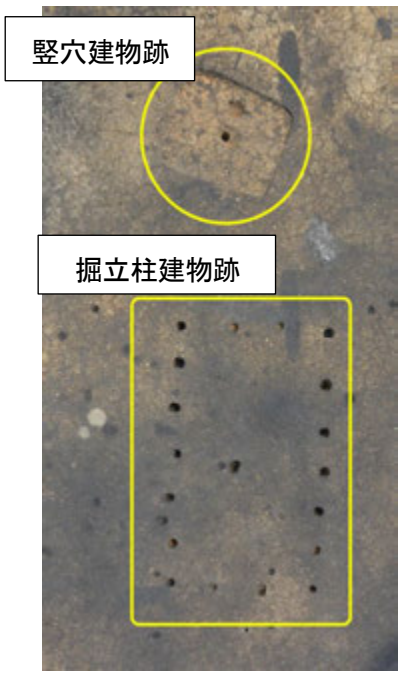
一番高いところにあるこの墓から，南西方向に多くの土坑墓が検出されることから，集落で最も地位の高い人物が葬られているのではないかと思われます。

円形周溝墓の空中写真

右の写真は本年度検出された掘立柱建物跡とその近くにある竪穴建物跡です。掘立柱建物跡は面積が約３２㎡あり比較的大型で，竪穴建物跡の面積は約１１㎡です。

注目される点は，通常の柱穴は平面形が円形をしているのですが，この２つの建物の柱穴の平面形は方形となっている点です。また，この２つの建物は土坑墓群の間に位置しており，特別な意味を持った建物だったと推測される点です。おそらく葬式などの祭祀を行った建物ではないかと考えています。福岡県や佐賀県鳥栖市などの北部九州でもこのような遺構がみつかっており，それらは墓前建物として紹介されています。

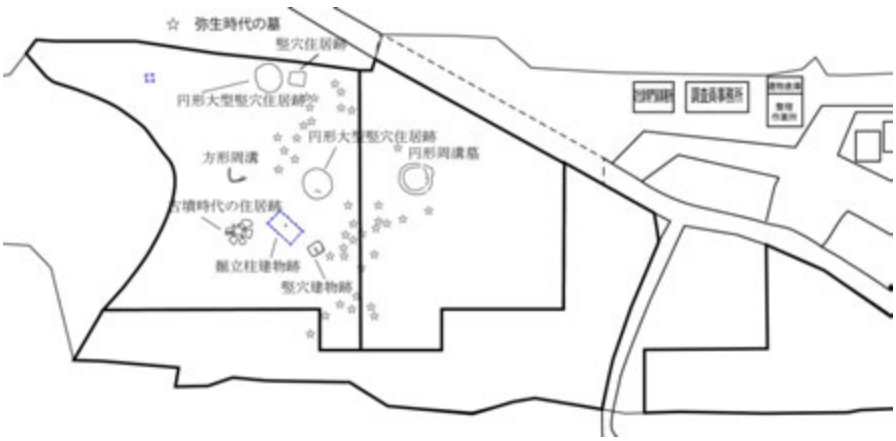
これまでに鹿児島県内では，弥生時代中期の土坑墓や墓前建物はみつかっていないので，この時期の南九州における葬送の風習を解明していく上で貴重な遺構であると言えます。



竪穴建物跡と掘立柱建物跡

まとめ

弥生時代は，中国や朝鮮半島に近い北部九州が文化の先進地だったのですが，永吉天神段遺跡の調査から，県内の弥生時代にも，居住域（住む場所）と墓域（墓のある場所）とを分けて暮らしていた場合があったこと，円形周溝墓が発見されたことから地位の上下(階級差)が出てきたことなど，北部九州と同じような集落の構造や墓制・葬制の内容が少しずつ明らかになってきました。



永吉天神段遺跡遺構配置図

文献史料からみた中世のかごしま

鹿児島県歴史資料センター黎明館　栗林　文夫

1　はじめに―文献史料と考古資料の性格の違い

(1) 文献史料

①古い史料ほど数が少ない。

②史料を伝えた人々が「残そう」という意志を持ったことにより現存する。

→例外（紙背文書，漆紙文書，墨書・刻書土器など）

③文献史料は，当たり前のこと，書く必要がないこと，しかし，今の私たちにとっては是非知りたいことを書き残さないことが多い。

(2) 考古資料

①昔の人々が不要になって捨てた物，使用しなくなって放置された物等を発掘調査により掘りあて，資料化される。

②考古史料は嘘はつかない→文献史料は「嘘をつくことがある」…「史料批判」の必要性

③多寡・大小の評価→見かけ上の差をそのまま短絡的に優劣の差と受け取ることはできない。

④存否の評価→見かけ上の存否の差は，必ずしも実在した，存在しなかったことの反映ではない。

⑤分布の空白のこわさ　〔②～⑤：佐原―1995〕

※もともと文献史料と考古資料は「かみ合っていない」！

2　薩摩半島の場合

(1) 島津荘からの年貢の輸送路

①牛屎院→和泉郡　〔江平－1996〕

②新平田，中郡遺跡

(2) 海上交易に携わる人々

①市来院住人志布志入道と志布志尼…志布志を出自とするか？　〔栗林－1994〕

→志布志入道：伊作荘の住人に小舟１艘を貸し与える。

志布志尼　：物詣でのために７ヶ月間上洛する。（『鹿児島県史料旧記雑録前編１』1182 号）

②揖宿郡地頭島津忠綱の梶取・同郡山河の住人字綾三郎延元男

→梶取＝年貢の運送にあたる　　山河＝年貢の積出港（『鹿児島県史料旧記雑録前編１』389 号）

３　大隅半島の場合

(1)島津荘からの年貢の輸送路

①百引村弁済使の存在→新田遺跡（鹿屋市輝北町百引）

②天神段，永吉天神段遺跡（大崎町）

③志布志湊の位置付け→島津荘の外港

※新田遺跡→天神段・永吉天神段遺跡→志布志湊→畿内の荘園領主のもとへ送られたか？

(2)志布志：湊として栄える。

①湊の最小限の構成要素：船着き・住人の家・宗教施設（寺院・墓）　〔村井－1996〕

②西大寺流律宗の宝満寺は赤橋守時（英時〈鎮西探題・日向国守護〉の兄，最後の執権）の帰依を受ける。得宗被官安東蓮聖が代官として支配　〔吉井－1994〕

③律宗寺院の点在＝瀬戸内海―豊後府中（金剛宝戒寺）―豊後佐伯（最勝寺）―日向志布志（宝満寺）―大隅種子島（慈恩寺）　〔小山－1997〕

④柏原の対岸，波見に権現山（319,8m）＝ランドマーク的機能？

⑤柏原別府（東串良町）：鎌倉時代末期，赤橋英時が地頭職を有した。

⑥唐仁（東串良町）：中国との交易活動や渡来人の居住にちなんだ地名。中世以来の海外との交易の拠点。

⑦下伊倉城（東串良町）：肝付氏による築城。肝属川の水運と海運を意識した重要な城。

⑧中世前期，肝属川河口部に拠点的港があった可能性→北条氏によって瀬戸内海から九州東岸にかけて海上交通路の整備が行われた。　〔柳原－1999〕

(3)蓮光院の歴史的位置（予察）

①縁起：慶雲５年(708)，役行者の弟子義覚，この地に下り当山を開闢，新熊野三社権現を勧請，本地弥陀・薬師・観音の三像を安置。（三国名勝図会）

②文保元年(1317)５月22日大隅国守護金沢時直書下（『鹿児島県史料旧記雑録前編１』1201号）→「飯熊別当並同扶持人彦兵衛尉兼村」。飯隈山別当の初見史料。岸良村御米船に海賊を働いた廉。

③室町期には熊野那智大社所蔵文書に先達として名前がしばしば登場する。

※志布志湾は人や物が集まる結節点。北条氏勢力が支配下に入れた。人が集まる場所には宗教勢力も入ってくる。＝熊野信仰→飯隈山新熊野社・照信院の建立？

※中世前期，九州東側海上交通のダイナミズム

→今後，大隅半島の河川流域で大規模発掘調査が行われたなら，万之瀬川下流遺跡群のような遺跡が見つかる可能性あり。

〔栗林－2005〕

4　おわりに―考古学へ期待するもの

(1)武士・寺社など史料に登場するのは中世社会のごく一部である。

史料に現れない広範な世界をどう描くか→考古学の必要性

(2)文献史料を自分に都合がいいように恣意的に利用しない。

(3)文献史学の成果を安易に利用しない→まずは考古学の手法を遵守するべき。

↓

考古学の重要性の放棄

(4)文献史学・文献史料への目配せ→文献史料に見える遺構の発見を。

意識を持つことで新たな遺構の発見が可能に。

(5)文献史料がカバーできない分野の遺構・遺物の発見を。

(例)漁場・漁村・宿・市，流通関係など。

人々の日常生活に関わる遺構・遺物→山城や五輪塔等の石造仏だけが中世の遺構ではない，それはごく一部にしか過ぎない。

【参考文献】

江平　望「島津本荘から大宰府への道」（同『島津忠久とその周辺　中世史料散策』高城書房，1996 年）

栗林文夫「中世の川上　第 1 節文献からの考察」

（『針原遺跡（伝河上氏墓跡）』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(8)，1994 年）

栗林文夫「中世」（『串良町郷土誌』2005 年）

佐原　真「原始・古代の考古資料」（『岩波講座日本通史別巻 3　史料論』岩波書店，1995 年）

吉井敏幸「種子島の寺院について〈後編〉」（『元興寺文化財研究所』第 50 号，1994 年）

小山　博「鎌倉時代後期南九州における海上交通について―律宗寺院の展開と海上交通ルート―」

（『宮崎県地域史研究』第 9・10 合併号，1997 年）

柳原敏昭「中世前期南九州の港と宋人居留地に関する一試論」（『日本史研究』第 448 号，1999 年）

発掘調査成果からみえてきた中世の薩摩半島

～万之瀬川下流域遺跡群を中心に～

県立埋蔵文化財センター　関　明恵

はじめに

中世の薩摩半島の歴史的様相は，近年の発掘調査成果（P. 17 参照）により，新たに多くのことが判明し，その内容の見直しも必要となってきている。

その中でも，万之瀬川下流域の南さつま市金峰宮崎に所在する「持躰松遺跡」からは，大量の貿易陶磁器が出土し，平成８年度に旧金峰町教育委員会が発掘調査を行った「持躰松遺跡第１次調査」とともに，当時，「対外交易の拠点か？」と考古学の分野のみならず文献史の分野からも注目を浴びた（写真１）。　この見解は，その後，持躰松遺跡に隣接する「渡畑遺跡」・「芝原遺跡」の発掘調査が行われ，大量の貿易陶磁器が発見されるとさらに確証を得ることとなり，これら３遺跡は，万之瀬川下流域遺跡群として一つの範疇で捉えることが重要であることも分かってきた。

本稿では，万之瀬川下流域遺跡群から発見された遺跡の性格を決定づける注目すべき遺構と遺物を紹介するとともに，その性格について述べておきたい。

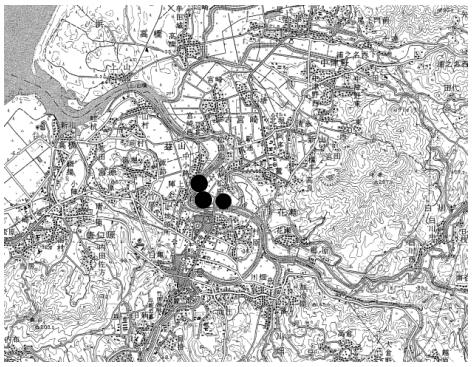


図１　持躰松・渡畑・芝原遺跡位置図

写真１　持躰松遺跡出土の貿易陶磁器

１　万之瀬川下流域遺跡群の位置

万之瀬川は薩摩半島の南西部，南さつま市を流れる川である。平成 11 年から 16 年にかけて中小河川改良事業（万之瀬川）に伴い，その下流域に所在した「持躰松遺跡」・「渡畑遺跡」・「芝原遺跡」の発掘調査が行われた。（図１，写真２）　これら３遺跡は，沖積平野に流れ出た万之瀬川が大きく右に蛇行した右岸，標高約５ｍの自然堤防上に隣接して所在する。

２　遺跡の性格を決定づける注目すべき遺構と遺物

⑴　注目すべき遺構

まず，渡畑遺跡で検出された３間×３間の総柱建物跡（図２）が挙げられる。この周辺からは，12 世紀後半頃の中国産と考えられる瓦（写真３）がまとまって出土しており，建物に葺かれていたと考えられる。中国瓦の出土例は非常に珍しく，福岡県の博多と箱崎，万之瀬川下流域遺跡群の渡畑遺跡と芝原遺跡，中郡遺跡（出水市）でしか発見されていない。博多での出土例から，総柱建物跡は，中国人が祖先の霊を祀った場

写真２　持躰松・渡畑・芝原遺跡遠景

所「廟」である可能性が考えられる。日宋貿易に関係した中国人が居住していた可能性さえ窺わせる遺構である。

また，渡畑遺跡の溝状遺構からは，12 世紀後半頃の中国産の同安窯系青磁碗2 枚，青白磁碗３枚，龍泉窯系青磁皿１枚が伏せた状態で発見されている(写真４・５)。縄紐等で６枚を一緒に重ねて結んであったものではないかと考えられる。中国船から降ろされた荷物か，商品として売るために碗や皿をセットにしたものか，運搬の状況を窺い知るための興味深い資料である。

持躰松遺跡からは，12 世紀後半の白磁碗と青白磁の合子を副葬した土坑墓が検出されている(写真６)。この地域で対外交易を掌っていた権力者の中の一人の墓であると考えられる。

芝原遺跡からは，膨大な数の柱跡が検出されており，掘立柱建物跡も数多く見つかっている。その規模は，万之瀬川下流域遺跡群の中でも群を抜いており，万之瀬川下流域遺跡群の中において中心地であったことが分かってきた。

⑵　注目すべき出土遺物

万之瀬川下流域遺跡群からは，多種多量の貿易陶磁器や国内産陶器，その他，南島との交易によりもたらされたカムィヤキが出土している(写真７)。

貿易陶磁器は，中国産の青磁や白磁の碗・皿が大量に出土した。そのほか，青磁の瓶や香炉，白磁の四耳壺や合子，11 世紀後半～12 世紀頃の中国磁州窯産と思われる瓶(写真８)，13 世紀～14 世紀前半頃の黄釉褐彩盤や緑釉陶器等も出土している。これらは，有力者が自分の権力を誇示するための道具「威信財」としての性格を持つもので，希少性の高い資料である。磁州窯系の瓶は，前述の「廟」と思われる建物跡付近から２個体分は出土しており，廟で使用されていた可能性も考えられる。また，対外交易を窺わせる遺物として，13 世紀頃の中国産陶器の大甕や壺が出土している。これらは中身が入った状態で荷揚げされたと考えられ，対外交易が行われた遺跡で出土する遺物である。

その他，芝原遺跡から薩摩塔の一部と考えられる石塔片(写真９)が出土している。近年，万之瀬川流域で薩摩塔や宋風獅子が発見されている状況を考えると，中国商人の存在がさらにクローズアップされる。

国内産陶器については，12 世紀後半～13 世紀前半頃の畿内産瓦器の出土が注目される。持躰松遺跡からは楠葉型と和泉型が，芝原遺跡からは和泉型(写真１０)が出土している。瓦器は，畿内から西日本一帯で生産されているが，南九州での産地は確認されておらず，出土例も極めて少ない。また，楠葉型瓦器碗の出土は，摂関家など京都の有力

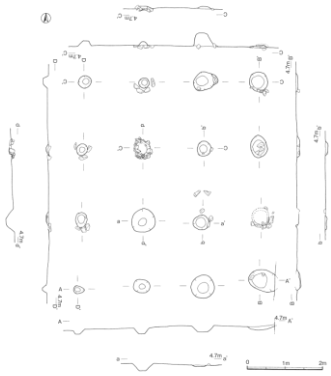


図２　渡畑遺跡で検出された総柱建物跡

写真３　渡畑遺跡出土中国瓦

写真４

写真５

写真４・５　伏せられた状態で出土した６枚の陶磁器

写真６　持躰松遺跡出土の土坑墓に副葬された白磁碗と合子

な勢力との関連が考えられ，万之瀬川下流域遺跡群への直接的関与が考えられる。また，13～14 世紀頃の瀬戸産の瓶子や卸皿，常滑産の大甕，備前産擂鉢や甕・壺など瀬戸内や東海地域からの陶器も移入されている。瀬戸産の瓶子や卸皿は県内でも希少性の高いもので，常滑産の大甕や備前産の擂鉢は，それらが広域流通する以前の製品が出土しており，この地域が早くから瀬戸内や東海地域との関係を結んでいたことがわかる。

徳之島で生産された 13～14 世紀頃のカムィヤキも多く出土している。このことは，ヤコウガイなどの南島産物の入手を目的とする，南島交易との深い関わりを示す。

その他，中世後期の興味深い資料として，渡畑遺跡から出土したポルトガル王家の紋章が上下逆さに描かれた中国景徳鎮産青花の碗を挙げておきたい。この碗に類似した碗が，トルコのトプカプ宮殿や京都にある古いキリスト教の協会に伝世している。トルコのものは，ポルトガルのマラッカ総督であったペトロ・ダ・ファリアが 1541 年に注文したものとされる。京都のものも 16 世紀前半に注文されたもので，渡畑遺跡のものと同様，紋章が上下逆に描かれている。渡畑遺跡出土の資料もポルトガルからの注文品であった可能性が高い。16 世紀中期以降，フランシスコ・ザビエルの日本上陸に代表されるような，ジャンク船に乗った宣教師の来日や，ポルトガル船自体の寄港が，万之瀬川下流でみられた可能性を窺わせる興味深い資料である。

３　万之瀬川下流域遺跡群の性格

以上のように，万之瀬川下流域遺跡群からは，対外交易を彷彿させる遺構や遺物が出土している。このような様相は，中世において九州の一大貿易都市である博多やその消費地である大宰府の出土状況に，規模こそ違えども非常に良く似ており，「ミニ博多」と言っても過言ではない。つまり，万之瀬川下流域遺跡群は，この地域における「対外交易の拠点」であったと言える。

また，畿内産瓦器や瀬戸産の瓶子や卸皿，常滑産の大甕，備前産の擂鉢・甕・壺の出土は，中国交易とは別に，東海から畿内そして瀬戸内を通るルートで搬入されたと考えられる。つまり，この地で中国交易を掌る有力者は，国内交易も掌っていたことを示唆する。

持躰松遺跡の発掘調査が行われた当初，持躰松遺跡論争がおこり，様々な評価があった。しかし，万之瀬川下流域遺跡群として３遺跡を一つの範疇で捉えると，持躰松遺跡や渡畑遺跡は中世後期において遺構・遺物の出土量が減少するが，芝原遺跡では中世全期を通じて数多くの遺構や膨大な遺物が出土している（表１）。

写真７　芝原遺跡出土の中世の陶磁器

写真８
上：持躰松遺跡出土の磁州窯系陶器
下：渡畑遺跡出土の磁州窯系陶磁器

写真９
芝原遺跡出土の
薩摩塔の一部と思われる石塔片

写真１０
芝原遺跡出土の畿内産瓦器椀

芝原遺跡は，遺構の密度・陶磁器の出土量ともに他の２遺跡を上回っており，万之瀬川下流域遺跡群における対外交易の拠点の中心地は，芝原遺跡にあたることが分かってきた。

万之瀬川下流域遺跡群の性格は，中国ルート，国内ルート，南島ルートの３つの交易ルートを掌握する権力者が所在した，対外交易の拠点であったと言える。

おわりに

万之瀬川下流域遺跡群の中世の景観を復元しようとする時，周辺に残る「当房（唐坊）」・「唐仁原」などの中国人の居住を窺わせる地名の問題や，阿多忠景など12世紀後半にこの地域を治めた有力な在地勢力と遺跡の関わりなど，考古学だけでは解明できない問題点も多く，文献史等の研究成果も交えての再検討が必要である。しかし，万之瀬川下流域遺跡群に対外交易の拠点が明らかに存在したことは，発掘調査により解明された多くの遺構や膨大な遺物が物語っている。

表１　万之瀬川下流域遺跡群のピークと日本史・地域史

【参考文献】

鹿児島県立埋蔵文化財センター2007『持躰松遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(120)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2011『渡畑遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(159)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2012『芝原遺跡３』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(170)

金峰町教育委員会1999『持躰松遺跡　第1次調査』金峰町教育委員会発掘調査報告書(10)

関明恵　2014「持躰松遺跡・渡畑遺跡・芝原遺跡～陶磁器からみた万之瀬川下流域遺跡群～」『南からみる中世の世界～海に結ばれた琉球列島と南九州～』鹿児島県歴史資料センター黎明館企画特別展

橋口亘　2014「薩摩南部の中世考古資料をめぐる諸問題－薩摩塔・宋風獅子・貿易陶磁・清水磨崖仏群・硫黄交易」『鹿児島考古』第44号　鹿児島県考古学会

堀田　孝博　2014「南九州における古代末期から中世前期の貿易陶磁の様相」『』琉球列島の貿易陶磁』台5回貿易陶磁研究集会（沖縄大会）発表要旨・資料集

発掘調査成果から見えてきた中世の大隅半島

～東九州自動車道建設に伴う発掘調査成果を中心に～

（公財）埋蔵文化財調査センター　中村　和美

はじめに

大隅地域は，火山灰台地が大部分を占める一方で，海に面し海運に有利とみられる地理的条件を有している。

この地域における近代的な発掘調査は，大正や昭和初期にマンローの垂水市柊原貝塚の調査や鳥居龍蔵の古墳の調査など，戦後は河口貞徳氏等の学術的な調査が知られる。昭和 50 年代以降は，大規模な開発工事が盛んになり，県教育委員会は埋蔵文化財の基本情報収集のため大隅地区埋蔵文化財分布調査やテクノポリス地域埋蔵文化財分布調査を行った。

昭和 60 年代になり，国道 220 号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査が実施された。その後，古江バイパス建設に伴う発掘調査が継続されている。東九州自動車道建設は現在，国分ＩＣから志布志ＩＣへとが展開し，それに伴う発掘調査がより大規模に実施されてきている。そのほか，県道建設や市町の農業基盤整備などの開発に伴う発掘調査も行われている。一方で，市町では保存目的の発掘調査も行われ，中には国の史跡となった遺跡もある。

このような経過の中で，大隅半島における中世の発掘調査成果は，国道 220 号鹿屋バイパスに伴う発掘調査でも当初から散見されていたが，関心は低かった。ここ 10 年来の調査により，改めて関心が高まってきたといえる状況である。

近年の発掘調査成果のポイント

(1) 中世墓を発見

大崎町野方の天神段遺跡において中世の墓が８基発見された。このうち１基からは貿易陶磁器である青磁碗が２点，皿が５点，青白磁小壺１のほか松喰鶴鏡，鏡を納めていた箱と思われる黒漆塗の木片，布にくるまれていたと思われる古銭，鉄製の和鋏，鉄製の紡錘車，滑石製石鍋が大小１個ずつ，意図的に割られた土師器の鍋などが出土した。

また，大崎町永吉の永吉天神段遺跡においても３基発見され，うち１基からは完形の白磁２点，釜模倣土器，湖州六花鏡が副葬されていた。

これらの墓は 12～13 世紀に位置づけられるものである。大隅における同様の墓は志布志市有明町長田遺跡（２基発見。白磁を副葬）や霧島市隼人町宗円坊屋敷跡（１基発見。白磁，青白磁，土師器，松喰鶴鏡，硯，刀子などを副葬）の例が知られる。

長田遺跡を除き，居住域と想定される掘立柱建物跡と近い場所に墓が作られ，貿易陶磁器や鏡，鉄製品，煮炊

土坑墓（天神段遺跡）

土坑墓（永吉天神段遺跡）

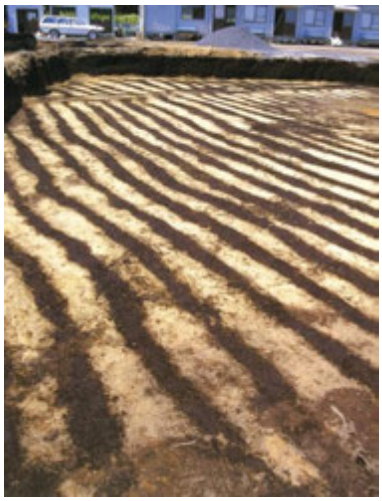
具のミニチュアなどを供え，葬られていることから「屋敷墓」と位置づけられる。「屋敷墓」はこの敷地を世襲するという表象的な意味合いも指摘されている。これは，鹿児島県において類例が知られていなかったことから，これまでの成果を再考する契機となった。副葬品の組み合わせも注目したい。特に鏡は，中国の湖州鏡と和鏡の松喰鶴鏡とがあり，他の事例と検討が必要と思われる。

(2) 桜島の文明ボラ

文明３（1471）年からの桜島の大噴火により鹿屋市輝北町，霧島市福山町，曽於市，都城市方面に軽石が堆積している。これは文明ボラ（Ｐ３とも。）と呼ばれている。この軽石層を手がかりにその上下で相対年代を把握できる考古学上の利点がある。また，その火山災害と後世に与えた影響を考えることにより，現代の災害に対する備えにも有効であろう。

曽於市末吉町関山西遺跡では，文明ボラを除去後，掘立柱建物跡２棟，土師器埋納遺構，ピット群，土坑，溝状遺構，古道，土坑墓，畝状遺構（畠）が発見された。溝状遺構の上部には厚く文明ボラが堆積していた。これらの遺構は古代～中世のものと位置づけられている。遺構の変遷はよく読み取れないが，中国の陶磁器や土師器埋納遺構の土師器の年代検討にかなり有効である。なお，関山西遺跡の土坑墓からは古銭が出土しており，15 世紀になると葬制が変わってきていることがうかがえる。

曽於市財部町踊場遺跡や同市大隅町狩俣遺跡において，この文明ボラに覆われた畠跡が発見され，15 世紀後半頃の土地利用や農法を考える上で重要である。農業は通常水を重視すると思われるが，その点では決して有利でない土地においても畠が営まれており，そのような場所に有効な作物が栽培されて，しかもかなり広範囲に渡っており，この地域の生産基盤になっていたのではなかろうか。



文明ボラに覆われた畠跡（踊場遺跡）

土師器集積遺構（関山西遺跡）

新発見の周辺

(1) 島津荘と大隅正八幡宮

中世前期の土地領有は，公領と私領である荘園に分けられる。11 世紀初めに大宰大監平季基が，日向国島津駅付近の荒野を開発し関白藤原頼通に寄進し，これが島津荘の始まりであるとされる。一方，大隅正八幡宮領は，石清水八幡宮別当を本家とする荘園で 12 世紀の初頭に寄進が相次いだとされる。大隅半島の荘園は，島津荘，大隅正八幡宮領がほぼ占めるという。しかしながら，発掘調査でこの実態を直接知りえるのは難しい。

霧島市大隅正八幡宮（鹿児島神宮）は，昨年，国の史跡「大隅正八幡宮境内及び社家跡」として指定された。鹿児島神宮と，神社に世襲的に奉仕する神職家である四社家の屋敷跡，別当寺弥勒院跡が指定された。かつては大隅正八幡宮を核とし，人々が集まり物資が消費される中世都市・宮内がここにあった。先述した宗円坊屋敷跡は，弥勒院跡の一角である。

四社家と呼ばれる桑幡氏，留守氏，最勝寺氏，沢氏の屋敷跡は土塁や堀に囲まれた防御機能をもつのが特徴である。また，沢氏館跡にある石塔群には中国に起源があると考えられている薩摩塔がみられ注目される。

(2) 村落の様子

国道 220 号古江バイパス建設に伴う鹿屋市花岡町領家西遺跡では，中世以降の調査成果として，掘立柱建物跡９棟，竪穴建物跡６基，溝状遺構，石組遺構，土坑，土坑墓が発見された。遺物をみる限り 12～13 世紀のものと 15～16 世紀のものに分けられそうである。土坑墓は 15～16 世紀のものと思われる。石組遺構は姶良市加治木町の市頭Ｃ遺跡，都城市鶴喰遺跡，加治屋Ｂ遺跡などでも発見されている。

鹿屋市輝北町新田遺跡は，古代から近世にかけての遺跡で，古代においても墨書土器や緑釉陶器が出土するなど注目されるが，中世においては３期に渡って遺構の変遷がうかがえる点で注目される。１期は掘立柱建物跡１棟と溝状遺構２条とシンプルであるが，２・３期は掘立柱建物跡，竪穴建物跡，柵跡，溝状遺構，道跡などで構成されるものである。

竪穴建物跡は，本県においては最初に伊佐市新平田遺跡おいて注目された。半地下式の建築構造が，歴史的には一度衰退したものの中世に再度採用されることの意義について諸説あるが，全国的に見られる遺構であり，概ね中世における交流の一側面と捉えて差し支えないと思う。

(3) 出土食器の構成

中世前半（12 世紀～14 世紀前半頃）の遺跡では，在地の土師器，須恵器（肥後の樺万丈窯系や東播磨系等），現在の愛知県知多半島一帯で焼かれた常滑焼，貿易陶磁器（中国南部の竜泉窯系・同安窯系の青磁や白磁，そのほか陶器類），滑石製石鍋等が一般的に出土する。

瓦器椀（川久保遺跡）

これとは別に，遺跡によっては出土が確認されているものに畿内などで生産される瓦器や東海地域の瀬戸焼，在地外で生産された土師器などがある。これら遺跡によっては出土するものに遺跡の性格を知る手がかりがある。

大隅地域では瓦器の出土例が増えてきている。特に霧島市の桑幡氏館跡からは楠葉型瓦器が出土した。楠葉型瓦器は，京都岩清水八幡宮の麓あたりにある摂関家の領地内で作られ消費されるもので，摂関家と関連ある何らかの往来があったものと想定される。瓦器は天神段遺跡や，最近，永吉天神段遺跡や川久保遺跡（鹿屋市串良町）でも発見された。

瀬戸焼・底卸目皿（永吉天神段遺跡）

また，瀬戸焼については，永吉天神段遺跡や新田遺跡で卸皿が出土している。

なお，14 世紀代は，不明な点が多くこれからの調

査研究によることになる。また，中世後半（15～16 世紀）の遺跡は，山城の調査が主となるけれども，在地の土師器，貿易陶磁器，瓦質土器（鉢などの器種），備前焼等が一般的である。貿易陶磁器には竜泉窯系青磁や白磁，青花（中国の染付），東南アジア産の陶器等がある。

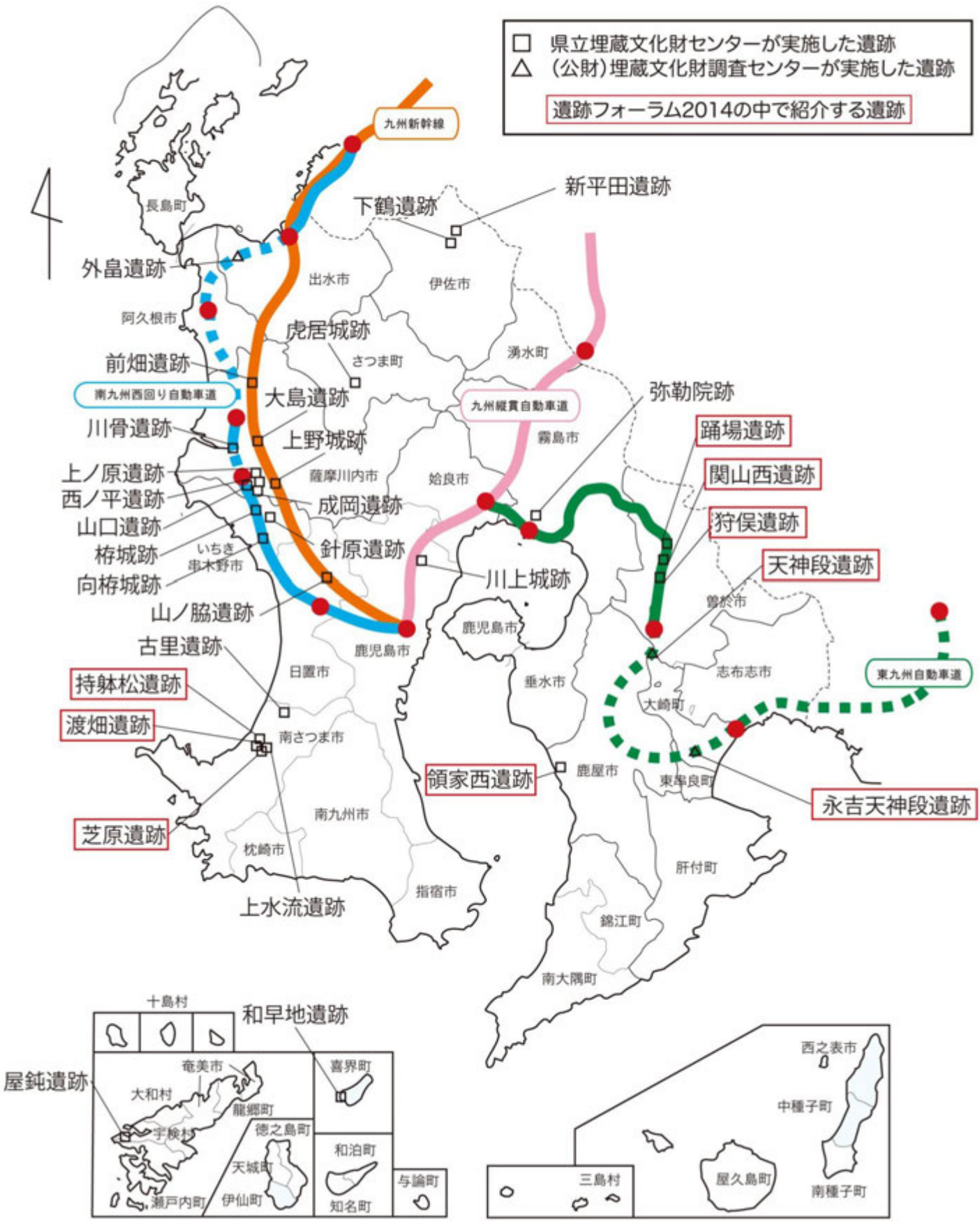
おわりに

大隅地域は，これまでも少なからず中世の成果はあったものの，どちらかというと中世と言えば山城で，それ以外は低調もしくは無いものというような雰囲気があった。近年の発掘調査により，地理的にも歴史的にもその空白を埋めることができつつある。中世後半の山城についても志布志城跡（志布志市），高山城跡（肝付町）などで調査が行われ新たな成果が上がってきた。

中世における地域支配の変容，交流それらに伴う文化の変容など更なる課題が具体的になったともいえる。他の研究分野との連携に加え，考古学的な分析も深化させる必要がある。

各遺跡位置図

センターが，これまでに発掘調査及び整理作業を行った中世の主な遺跡



黎明館企画特別展

「南からみる中世の世界～海に結ばれた琉球列島と南九州～」

鹿児島県歴史資料センター黎明館　中原　一成

1　黎明館企画特別展「南からみる中世の世界～海に結ばれた琉球列島と南九州～」背景

(1) 県内の中世遺跡の調査における成果

(2) 黎明館企画特別展「南からみる中世の世界」

・平安時代後期から鎌倉時代，南北朝期に至る，中世前半（11 世紀～14 世紀前半）

・南九州・琉球列島に視点を置き，「唐物」として珍重された貿易陶磁や国産交易品，文書史料を手がかりに，人々が海洋を舞台に躍動した時代の「ひと・もの・文化」の交流を紹介

・学際的研究を通じて，全国的に注目されている県内の中世遺跡を，全国の主要な中世遺跡の中に位置づけ，相対的位置づけを探る。

(3) 展示から見えてくるもの

・対外交易と国内交易の位相

・琉球列島と南九州の歴史的画期の連動性　⇔　東アジアの変動

・威信財としての貿易陶磁

平泉セット…白磁四耳壷・白磁水注・渥美焼壺

鎌倉セット…白磁四耳壷・青白磁梅瓶・青白磁水注・黄釉褐彩盤（緑釉陶器盤）・茶器・青磁双魚文盤(坏)・青磁花生・青磁酒会壷・青磁太鼓胴水差・青磁龍文盤

2　「南からみる中世の世界」展示構成

序章　南九州と南島

（1）広田遺跡（弥生時代～古墳時代）

（2）沖縄県北谷町伊礼原D 遺跡・後兼久原遺跡(貝塚時代後期)

（3）奄美市土盛マツノト遺跡(古代平行期)

（4）喜界町城久遺跡群（古代）

境界領域（周縁世界）

『新猿楽記』（11 世紀　藤原明衡）　八郎真人…東は俘囚之地から西は貴賀之島

夜久貝，硫黄，色皮

第１章　東アジア世界と日宋貿易

（1）大宰府鴻臚館跡の貿易陶磁（第 5 次調査 SK56，第 3 次調査 SK01・11 世紀前半）

・鴻臚館交易の終焉　永承 2(1047)年「大宋商客宿房放火」(『扶桑略記』,『百錬抄』)

（2）住蕃貿易と国際交易都市博多（博多遺跡群第 79 次調査 1827 号土坑・11 世紀後半～12 世紀前半，祇園駅出入口 1 号土坑・12 世紀後半）

・貿易管理体制－安置供給（年紀制）・唐物使による「検領」と「和市」（官司先買権）

⇒12 世紀半ばまでは貿易管理体制（渡邊誠 2012）

・「住蕃貿易の証拠」（大庭康時 2003）

１．貿易陶磁器の高い比率

２．『綱』銘墨書の大量出土

３．貿易陶磁器の一括大量廃棄遺構の存在

４．貿易船のコンテナとしてもたらされた大型容器の出土（陶器の壺・甕類）

・対外交易（貿易）拠点（港湾遺跡）－　国内交易拠点・集散地　－　消費地

(3) 日宋貿易の展開（在自西ノ後遺跡，白井川遺跡，楼楷田遺跡，大物遺跡など）

(4) 奄美大島倉木崎海底遺跡

第２章　中世の都市と町

(1) 京と鎌倉

京（鳥羽離宮跡，押小路殿跡，法住寺殿跡，左京八条三坊ほか）

鎌倉（今小路西遺跡北谷３面焼土層下，若宮大路遺跡群，大町出土青磁ほか）

(2)　描かれる唐物（「酒飯論図」（摸本），国立歴史民俗博物館所蔵陶磁器）

(3)　草戸千軒町遺跡～甦る中世の町

第３章　カムィヤキ・石鍋・貿易陶磁～平安時代後期の奄美・沖縄と南九州

(1) カムィヤキ・石鍋（伊仙町カムィヤキ古窯跡群，長崎県大瀬戸町石鍋製作所遺跡）

(2) 喜界島城久遺跡群と沖縄諸島の遺跡（後兼久原遺跡，小堀原遺跡，新里村遺跡ほか）

(3) 平安時代後期の南九州（「阿多郡司平忠景施入状案」，「源頼朝加判平盛時奉書案」ほか）

(4) 中世前期の遺跡と遺物（万之瀬川下流域の中世遺跡群，大隅正八幡境内及び社家跡，市頭遺跡，天神段遺跡ほか）

第４章　鎌倉時代の交易・支配と蒙古襲来

(1) 東国御家人の西遷と南九州（神奈川県綾瀬市宮久保遺跡，中郡遺跡群，柏原遺跡ほか）

(2) 蒙古襲来～文永・弘安の戦いと鷹島海底遺跡（「関東御教書」，「比志島時範軍忠状」）

(3) 日元貿易の展開（「金沢貞顕書状」，「関東使者義首座注進状案」,若宮大路遺跡群ほか）

(4) 得宗家被官千竈氏と南島支配(「千竈時家譲状」，「島津道鑑譲状案」，馬場田遺跡ほか)

第５章　南からの風～グスク時代の奄美・沖縄

(1) 南九州の中世山城と交易（知覧城跡，向栫城跡，虎居城跡，志布志城跡，「鹿児島神宮所蔵陶磁器」ほか）

(2) 奄美のグスク（「おもろそうし」，赤木名城，用安湊城，辺留城，『海東諸国記』ほか）

(3) 三山鼎立と沖縄のグスク（今帰仁城跡，浦添ようどれ，勝連城跡，島添大里グスク）

(4) 南海の港湾都市と王朝の貿易陶磁（渡地村跡，首里城二階殿地区，「琉球交易港図」，首里城京の内跡 SK01）

３　中世遺跡の調査と成果の活用

(1) 中世遺跡の調査の視点と課題

・事前のリサーチ（古文書・伝承）

・非自然堆積層・盛土層・焼土層，造成と地形改変(包含層の欠落)，遺構の時期区分

(2) 整理・報告の課題

・歴史研究者との連携

・貿易陶磁（大宰府編年）と在地土師器

黎明館企画特別展

『南からみる中世の世界～海に結ばれた琉球列島と南九州』

序章　南九州と南島

広田遺跡出土ヤコウガイ貝匙

古代並行期の喜界町 城久遺跡群

【喜界町教育委員会】

第一章　東アジア世界と日宋貿易

博多遺跡群 第 79 次調査 1827 号土坑出土資料

博多遺跡群 祇園駅出入口 1 号土坑出土資料

【福岡市埋蔵文化財センター】

鴻臚館跡 第 3 次調査 SK01 出土資料

【福岡市埋蔵文化財センター】

第二章　中世の都市と町

今小路西遺跡 北谷 3 面出土資料

【鎌倉市教育委員会】

若宮大路遺跡群　青白磁龍首水注

【鎌倉市教育委員会(国立歴史民俗博物館保管)】

第三章　カムィヤキ・石鍋・貿易陶磁

城久遺跡群 山田中西遺跡出土資料【喜界町教育委員会】

第四章　鎌倉時代の交易・支配と蒙古襲来

鷹島海底遺跡出土資料【松浦市教育員会】

若宮大路周辺遺跡群出土資料【鎌倉市教育員会】

第五章　南からの風～グスク時代の奄美・沖縄

浦添ようどれ出土瓦【浦添市教育員会】

渡地村跡出土資料【那覇市教育委員会】

【参考文献】

渡邊誠　　2012　『平安時代貿易管理制度の研究』　思文閣出版

鹿児島県教育委員会　2006　『先史・古代の鹿児島　遺跡解説(通史編)』

大庭康時　2003　「博多遺跡群の発掘調査と持躰松遺跡」『古代文化 vol.55』財団法人古代學協會

村井章介　2011　「見直される境界空間」根津美術館研究紀要『此君』第 3 号　根津美術館

池田榮史　2007　「古代・中世の日本と琉球列島」『東アジアの古代文化』130 号　大和書房

亀井明徳　1997　「東シナ海をめぐる交易の構図」『考古学による日本史 10　対外交渉』　雄山閣出版

新里亮人　2009　「九州・琉球列島における 14 世紀前後の中国陶磁と福建産白磁」『13～14 世紀の琉球と福建』平成 17～20 年科学研究費補助基金基盤研究研究成果報告書　熊本大学

山内晋次　2009　『日宋貿易と「硫黄の道」』日本史リブレット 75　山川出版社

中世年表

世紀	中国	朝鮮	日本	主な出来事	鹿児島の主な出来事
10	五代				997　奄美島人，薩摩など太宰府管内諸国を襲撃
					998　太宰府，貴駕島に奄美人追補を命じる
11	北宋				
				1016　藤原道長，太政大臣（摂政）となる	1020　南蛮人，薩摩国襲撃事件
					万寿年間（1024～28年），平季基が島津荘を関白藤原頼道に寄進
					1029　平季基，大隅国衙，藤原良孝宅を焼き打ち
				1047　鴻臚館，焼失	
				1052　前九年の役　　1053　平等院鳳凰堂完成	
					1080　日本国薩摩州，高麗に遣使（『高麗史』）
				1083　後三年の役　　1086　白河上皇，院政を開始	
12					曽於市大隅町月野下岡の経筒（1105年銘）　『今昔物語』
				1124　奥州藤原氏，中尊寺に金色堂を建てる	
				1127　宋の滅亡，南宋建国	
	南宋				阿多郡司平忠景，私領を観音寺に寄進　「八幡正宮牒」
					大隅国分寺の石塔（1142年銘）　「薩摩国司庁宣写」
				1151　太宰府の目代等軍兵を率い，宮崎・博多で大追補を行う	
				1158　保元の乱　　1159　平治の乱	
				1167　平清盛，太政大臣となる	応永年間（1161～63年），平忠景貴海島に追放される
				1180　清盛，福原遷都	1177　俊寛ら，鬼界島（硫黄島）に流罪
				1185　壇ノ浦の戦い　　平氏、滅亡	1185　惟宗忠久を島津荘下司職に補任
				源頼朝，諸国に守護・地頭を設置	このころ，島津荘に来着した唐船をめぐり，太宰府と争う
				1189　奥州合戦，平泉滅亡	1188　鎮西奉行天野遠景ら，貴海島の義実を追討
				1192　源頼朝，鎌倉幕府を開く	
					1184　鮫島宗家，阿多郡惣地頭になる
13				1206　チンギス＝ハン，モンゴル統一	1203　比企氏の乱
					1217　一遍上人，正八幡宮（鹿児島神宮）に参拝
				1221　承久の乱（後鳥羽上皇左遷）	1228　島津久経，宮崎役所で死去
				1232　貞永式目（御成敗式目）ができる	
					1248　渋谷定心兄弟，高城・祁答院他惣地頭になる
				1260　モンゴル，フビライ＝ハン即位	
				1268　北条時宗が執権となる	
				1274　文永の役（第１回蒙古襲来－元寇）	
				1279　南宋滅亡	
	元			1281　弘安の役（第２回蒙古襲来－元寇）	1286　薩摩国府，石築地役のため幕府に「薩摩国図田帳」を提出
				1297　徳政令を出すが，御家人の生活は苦しさを増す	
14					
				1323　日元貿易船　韓国新安沖で沈没	
				1333　鎌倉幕府，滅亡	
				1334　後醍醐天皇による建武の新政開始	
				1336　後醍醐天皇が吉野に遷り、南北朝の動乱がはじまる	
				1338　足利尊氏，征夷大将軍となる	
				1341　室町幕府，天竜寺船を元へ派遣	1342　後醍醐天皇王子懐良親王，谷山城に入る
				1367　高麗，倭寇の禁圧を要求	1363　島津貞久，薩摩国守護を師久，大隅国守護を氏久に譲る
				1368　明建国	
				1371　洪武帝，懐良を日本国王に封じる	
				1392　足利義満，南北朝を統一	
				高麗滅亡，李氏朝鮮建国	
15				1401　義満，明との勘合貿易開始	
				1402　明，永楽帝即位	
				1404　勘合貿易開始	
				1419　応永の外寇	1419　南蛮船，阿多忠着領内に来着
				1432　義政，明に遣使，国交再開	
				1467　応仁の乱（～1477）	
					1476　桜島の大噴火（文明ボラ・P 3）
				1482　足利義政，東山に銀閣	1491　琉球船，薩摩に来航
16					
				1543　種子島，鉄砲伝来	
				1549　ザビエルが鹿児島に上陸，キリスト教を布教	
				1560　桶狭間の戦い（織田信長，今川義元を倒す）	
				1573　室町幕府が滅びる	
				1578　織田信長が安土城をつくる	
				1582　本能寺の変	1582　島津義弘、豊臣秀吉に降伏
				豊臣秀吉が明智光秀を倒す（山崎の戦い）	
				刀狩令を出す（兵農分離の実施）	
				1590　秀吉が北条氏を破り，全国統一	1588　南甫文之を招く（薩南学派の全盛期）

用　語　集

・遺構（いこう）

昔の人々が残した生活の跡のことです。建物の跡（竪穴住居跡（たてあなじゅうきょ），掘立柱建物跡）や調理場の跡（集石（しゅうせき）など），お墓（土坑墓（どこうぼ））など。

・遺物（いぶつ）

昔の人々が使った道具のことです。土器や石器，陶磁器，金属器など。

・竪穴住居跡（たてあなじゅうきょあと）

昔の人々が住んだ家の跡のことで，地面を掘りくぼめて底面を平らにつくり，柱を立てて，その上に茅などの植物で屋根をかけた構造の住居のことです。柱や屋根が残っていないことがほとんどで，竪穴部分に埋まった土の色を見分けて発見される場合が多いです。

・礫群

拳大の石を多数集めて加熱し，熱くなった石の上に肉などを置き調理したと考えられている旧石器時代の遺構のことです。

・掘立柱建物跡（ほったてばしらたてものあと）

地面に柱を立てて作った建物の跡のことです。建物自体は残っていないことが多いので，柱の痕跡（色の違う土の部分）が等間隔に並んで見つかると掘立柱建物跡の可能性があります。

・土坑（どこう）

地面に掘られた人為的な穴のことです。何のために掘られたか分からないものも多いです。

・土坑墓（どこうぼ）

地面に隅丸方形や楕円形等の穴を掘り，遺体を埋めた墓のことです。遺体と一緒に，その人が使っていた道具など（副葬品（ふくそうひん）という）が納められることもあります。

・円形周溝墓

弥生時代の墓の形で，溝を円形に巡らし中心に遺体を置く場所（土坑墓等）を設けたものです。

・土師器（はじき）

古墳時代から平安時代にかけて作られた赤褐色の素焼きの土器を土師器と呼びます。

・青磁（せいじ）

陶磁器の一種で，釉薬（ゆうやく）に含まれる鉄分が還元炎焼成（かんげんえんしょうせい）（窯の中に空気を入れないように焼く方法）によって青く発色した焼きものです。ときに黄色や灰青色になることもありますが，青磁といいます。日本では，中国で焼かれたものが多く出土します。

・白磁（はくじ）

灰白もしくは，白色の素地に透明もしくは乳白色，白色の釉薬をかけて高温で焼き上げた焼きものです。日本では，中国で焼かれたものが，多く出土します

・青白磁

白色の素地に，淡青色の釉薬がかけられた高級な焼きものです。

・青花（染付）

主に中国で焼かれた磁器の一種で，呉須（青色の顔料）により文様が描かれます。

・瓦器

軟質の土器で，窯で生産されます。焼成の最終段階で炭素を表面に吸着させるため，暗い灰色をしています。椀，皿を中心に，西日本一帯で生産されていました。

・威信財（いしんざい）

自分の権力や社会的地位を示すための道具。

時代区分と年代値

※年表の間隔は便宜上，調整してあります。

MEMO

かごしま
遺跡フォーラム 2014
～発掘調査の成果からみえてきた中世のかごしま～
資料集

発行：2014（平成 26）年 10 月 26 日
編集：鹿児島県立埋蔵文化財センター
南の縄文調査室